みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Miscellaneous Notes on Collecting of Ethnological Objects in West Africa

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 端, 信行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004668

西アフリカ収集調査雑記

端　　信　　行*

1. ダカールにて　わたしが，西アフリカ西端の中心地ダカールの国際空港におりたったのは，1975年8月30日の夕暮れであった。入国手続きをすませ，税関を出ると，例によって，ワーッとポーターやタクシー運転手がむらがってくる。荷物をもって自分の車につれていこうとする。それをさえぎってタクシー代の交渉をする。だんだん闇がせまってくると，あまりゆっくりとかまえてもいられない。ようやくにしてダカール市街へ向ったときは，あたりは濃紺の闇に包まれてしまっていた。わたしのアフリカは，いつもこうしてはじまる。

パリからはエール・フランス機でダカールに向ったのだった。この便は，ダカールからリオ・デ・ジャネイロ，サンパウロに向うもので，乗客はブラジルへ向う客がほとんどで，ダカールでおりたのは，ほんの数人だった。パリ＝ダカールが6時間，そしてダカール＝リオが6時間。ダカールは，まさしくヨーロッパと南米の中継地なのである。

暗くなって街へはいると，ホテルさがしもなかなか思うようにいかない。だからわざわざ早朝にパリをたつ便をえらんだのに，それが遅れに遅れて，こんな時間になってしまったのだ。ダカールの目ぼしい安ホテルはどこも満員ということだったが，ようやく3軒目で部屋をみつける。それも冷房なしの部屋であった。冷房つきの部屋は，料金が倍になるから，とても出張費がもたない。食費はあまりけずれないので，せめて部屋代でというわけである。だいたいにおいて，ダカールにかぎらず西アフリカはホテル代が高く，普通に旅行していて，パリの1.5倍はする。

ダカールの第1夜は，蒸し暑さやら天井からアブラムシが落ちてきたりして，あまり熟睡できなかった。西アフリカでの収集調査はこうしてはじまった。

ダカールに着いた日の翌日は日曜日であったが，博物館は開いているだろうと思い，早速たずねてみた。しかし日曜は休館日でもないのに門はとじられていた。中には門衛しかおらず，聞いても，今日は閉っていてだれもいないという。明日もう一度来いとのことなので，仕方なく街の方に足をむけ，足で土地を覚えることにする。

ダカールの街は，よく知られているように，西アフリカの西端に位置し，それも大西洋につき出たヴェルデ岬の陸けい島に立地しているので，博物館の建物から500メートルも行けば海岸に出る。それは実に雄大ながめであった。風が強く，20メートル近い比高をもつ岸壁に高

* 国立民族学博物館第3研究部

い波がくだけていた。

街のほぼ中心にある中央市場の近くに，木彫りの人形や仮面を中心にした土産物屋がズラリと軒をならべている。今回の調査目的が収集であるだけに，2，3軒をひやかしてみる。土産物屋だから研究資料としてよいようなものは少ない。しかし彼らの生態や情報は興味深い点が多く，つい時間をすごす。その近くの横路をはいると，銀細工の店や作業場がならんでいる。この銀細工に代表される金属細工では，ダカールは西アフリカの中心地のひとつだ。おそらくこの一角だけでなく，この街のあちこちにこうした区域があるにちがいない。

街を歩いてみると，ダカール市街は明らかに他の西アフリカの代表的都市と異なる景観と匂いをもっていることがわかる。あえていえば，それはアラブ的な匂いである。市街の道はばはせまく，細い小路をいくつももっている。道はばがせまいので，小路を歩くと，両側から白いシックイの壁がせまってくるようである。こうした景観は，ヨーロッパ人とくにフランス人の建設によってできた都市にはないものだ。小売商店などをみると，ほとんどがアラブ系の人びとである。わたしはかつてザンジバル市街を訪れたことがあったが，その時の情景を思い出していた。

月曜日からは精力的に動きまわって，収集の可能性を調べた。日本大使館では荒木大使と面会することができ，わたしたちの国立民族学博物館の設立と活動を説明し，協力を依頼する。大使は快くその趣旨を受けいれられ，あとは文化担当の飯沢書記官と収集ならびに輸出の方法を調査した。

同時に，ダカール博物館を再訪する。博物館はあいかわらず閉っていたが，通用門から中にはいり，案内をこう。そこでようやく学芸員のB. チャム氏に会うことができた。彼はイコムの国際会議で，その時日本から出席しておられた広瀬鎮氏とも会ったとかで，大いに相談に乗ってもらった。裸足のチャム氏とは2日間にわたり，博物館の前庭のベンチで情報交換をすることができた。ただ博物館は，今電気系統の故障とかで，結局，満足に見学できなかった。この博物館は，かつてのアフリカ研究の中心のひとつ黒アフリカ研究所（IFAN）の施設であったが，今はダカール大学黒アフリカ研究所の付属となっており，大学と結ばれている。それだけに故障による閉館とは。

こうして得た情報によると，収集調査という点からすれば，ダカールは極めて条件が悪かった。それは輸送の困難さによるものであった。チャム氏の話では，収集品を荷物として輸出する場合，博物館の許可が必要とのことであった。チャム氏はその実務担当者として，わたしたちの活動には大いに援助しましょうと言ってくれた。

しかし輸送については，まずダカールからは日本へ向う直接の船便がないのであった。したがって日本向けの荷物は，1度ヨーロッパ（フランス）にもどり，そこから再び日本向けに輸送されるという。これによるとダカールで積み出してから日本に着くまで，半年ぐらいはすぐかかってしまうという。年度末の3月末日までに，収集品を館におさめなければ

ならないわたしとしては，とても荷物を出せない。

さらに不運なことには日本から出しておいた連絡もうまくいっておらず，船会社では運賃の後払いはできないとのことであった。これには日本大使館もずい分骨を折っていただいたが，どうしても駄目であった。こうして船便はまずあきらめねばならないことになった。

次に航空荷物で送る方法を調査したが，ダカール支店をもつ各ヨーロッパの航空会社は，いずれも運賃先払いでないと航空荷物は受けつけないとのことであった。これはとてもできる相談ではない。収集費の半分が運賃でとんでしまう。この航空荷物は先払いでなければならないということは，西アフリカ全域でそうなので，結局，次の訪問地である内陸国マリからは，直接，日本へ輸送する方法がないことになった。

ダカールの日本大使館には，収集のために必要なら倉庫をつかってもよいとか，万一手続きに日数がかかっても運送手続きさえわたしが責任をもってやれば，あとの処理はお手伝いしましょうと，いろいろの準備を考えていただいた。しかし輸送手段という根本的なところで暗礁に乗りあげてしまった。博物館のチャム氏もしきりに残念だと言ってくれたが，ついにどうすることもできず，ダカールでの収集は断念した。

2. バマコからアビジャンへ　9月3日は，まだ暗い5時30分に起きる。6時ちょうどにホテルのフロントへおりる。前夜，今朝の6時にタクシーを言っておいたが，フロント番の男は地面に布を敷いて，ちょうどイスラムの朝のイノリの最中であった。声をかけるわけにもいかず，しばらく待っていたら，そのうちタクシーが来た。すぐにダカール郊外の空港に向ったが，フロントの男はまだイノリを続けていた。

ダカールからマリの首都バマコまでは，飛行機で1時間半たらず。空港で入国手続きをやっていたら，うしろから「ジカンガナイ」というつぶやきのような日本語が聞こえる。ふりかえるとひとりのアフリカ人だ。バマコではこの男ムサが，何かと案内をしてくれることになった。この男，本職はタクシー運転手。時おりバマコにやってくる日本人には，かならずといっていいほどつきあっているらしい。今までのわたしの経験では，時どき，日本人の気ごころをうまくつかむアフリカ人に出会うことがあるが，ムサはそのような男のひとりだった。

バマコの町はずれにある博物館には，若い責任者 Y. クリバグ君がいた。ダカールでもそうであったが，館長は休暇中で，バマコにはいないとのことで，もっぱらこの青年から情報を得る。しかし収集品の持ち出しについては自分ではよくわからないというだけで，詳しい情報は得られなかった。そうしたことは，すべて館長が知っているとのことであった。

この博物館は小じんまりした2階建てで，1階が展示室，2階が事務室となっていたが，ここも展示室は閉っていた。理由をたずねると，電気がつかないとのことで，今は雨期だから閉めきっておくのだという説明であった。しかしわたしには特別だと言って，扉はもちろん窓も全部あけて見学させてもらった。かつてはフランス人の研究者もいたらしいが，

今は全く手が加えられておらず，その研究者が指導して作製したらしい住居の模型が，7点ばかりほこりをかぶっていた。他の収集品も未整理のものが多く，それ自体，収蔵展示のおもむきをみせていた。

わたしが滞在中のバマコでは，毎日，朝から夕方にはげしい風雷をともなう雨があり，内陸の雨期の様相を示していた。そのため，町中の道路はほとんど泥道となり，水はけの悪いところは大きな水たまりとなり，町を行く人の足はうばわれがちであった。それでも町中に数ヵ所以上もある市場は，変わりないにぎわいをみせていた。こうした市場のにぎわいをみていると，いつもわたしは，アフリカ人はある意味においてみな商人だと思ったりする。アフリカの市場の役者のひとりは，アフリカの女たちであろう。英語圏ではマーケット・マミーとよばれる彼女たちは決して商人ではない。亭主もいて子供もいる主婦なのである。主婦であり，かつみんなが市場の売り手になる。もちろん日々の生活の糧をうると，それはたちまち買い手に変わる。野菜の売り場の売る女，そして買う女。その表情はアフリカ独特のものがあると思うのは，わたしのひとりよがりだろうか。

アフリカ社会は市場をひとつの結び目として，交換が相互に入れかわりながら，きわめて細かく発達していると思われる。また別の言い方をすれば，自給的でありながら分業的である。全体としてそういうしくみが，よく発達しているのだと思われる。

バマコの名物のひとつは，街路のあちこちで行なわれている手織り風景である。わたしも今回，フルベ族の人たちのそれをゆっくり観察することができた。ある1日の午後，フルベ族の織り人と話しているときも，急に空が暗くなってきた。それでも彼は仕事をやめようとしない。20メートルも織り糸を引っぱるので雨がふってきたらどうするのかと思っていたが，彼は雨がひと粒かふた粒，落ちてくるかこないその瞬間に，パッと走っていって張りつめていた糸をうでに巻いてもどってきた。それはまるで，自然を熟知しているかのようなしぐさであった。乾期ならいざ知らず，今の時節には，こうした雨の合間を惜しんで仕事をつづけるものらしい。彼らの手織りを観察していると，その技術の記録とともに，その労働にたずさわっているときの，こまやかな気くばりさえも，それをとりまく文化として記録されねばならないと思われた。

いずれにしても，バマコではまだ収集に機熟さずといったところで，次の訪問地アビジャンに向う。象牙海岸の首都アビジャンは，その経済活動を背景に，西アフリカ西部の中心地の地位を占めつつあり，ダカールよりも条件はよいであろう。収集調査の期待はそこに集中した。

3. アビジャンで収集調査　バマコからアビジャンへは，便の都合で，コナクリ（ギニア），フリータウン（シエラレオネ），モンロビア（リベリア）経由となった。午後にバマコをたったものが，アビジャンに着いた時は，深夜になっていた。入国手続に手間どって，その夜は空港ホテルに泊まることになった。

翌日は早速，日本大使館に出向き，中村代理大使，森アフリカ開発基金理事代

理，北沢書記官らにお会いし，アビジャンの諸事情を聞いた。それによれば，アビジャンはダカールとはちがって，日本の各商社の支店もあり，日本との取り引きがあるので，日本船が来ているという。またそれらの船も西アフリカから直接日本に向うので，積み出せば1ヵ月半ほどで荷物は日本に着くとのこと。こうした事情を聞いたので，アビジャンにしばらく滞在し，民族資料の収集に着手する決心をした。さらに大使館に協力を依頼し，快諾を得た。

アビジャンの博物館の館長であるB.オラス博士は，日本ファンの方として知られており，日本で象牙海岸の諸民族資料の展覧会を2度にわたって開催に努力された方である。今回のアビジャン訪問にあたっては，オラス博士の援助もかなり期待されたのであったが，わたしがアビジャンに着いた頃は，休暇でヨーロッパに行っておられた。ヨーロッパでもそうだが，今回でも，主要な人びとはほとんど休暇中ということが多く，わたしたちの出張時期のむずかしさも思い知らされたのであった。

それでもアビジャンの博物館の副館長A.ベクロ氏は，オラス教授不在にもかかわらず，わたしの訪問の意図をよく理解され，民族資料のコレクションの紹介や輸出許可の手続きなどに多大の援助を惜しまれなかった。こうした援助なしには，とても収集の仕事はできるものではない。

このアビジャンの博物館は，月曜が休館日で，そう大きい建物ではないが，ガイド1人，守衛2人が展示室を管理していた。守衛のひとりは，バラフォンとよばれているヒョウタンの共鳴を利用した木琴の演奏をやり，観覧者のもとめに応じて演じていた。展示は民族（ないし部族）単位でよくまとめられており，さすがにわたしたちの目にはうらやましいような標本が展示されていた。

さらにその奥には，裏庭を囲むような形に建てられたコ字型の長屋があり，事務室や収蔵室，そして修理室などが並んでいる。

修理にあたっているのはA.コサ氏で，彼は終日，完全な標本を2，3点自分のまわりにおいて作業をしていた。その方法は全く手造りで，もとの標本の材料を自分で選んで，自分の考えで修復をするのであった。それ以外に，敷地内には東屋風の作業場があり，そこではわたしが訪れたときは，いつも数人の男たちが作業をしていた。聞くとそれぞれ国内の各地の村からやってきた男たちで，彼らは，自分の村の彫刻や民具をそこで作っているのだとのことであった。それは売るためのものではなく，やはり今日では手にはいらなくなったモノが沢山あるので，一定期間働きに来てもらい，その作品を博物館の標本とするのである。彼らの派遣は，郡役所を通して依頼するのだという。なかなかきめの細かい制度である。

ここアビジャンの博物館は，ダカールとはちがってアビジャン大学とは関係なく，文部省の直轄となっている。しかし実際には，2，3の学生が常時勉強に来ているようであった。

アビジャン大学の方には，民族・社会学研究所があり，わたしは国連の専門家として象牙海岸国文部省のテレビ教育計

画に参画していた森本氏を通して，所長のニャンゴラン＝ブーレ教授ともお会いすることができた。教授はわたしたちの活動を非常に喜ばれ，博物館とは別にいろいろ協力できることを約された。また教授は，今までヨーロッパ人の手によってすすめられてきたアフリカ研究のあり方の批判の上にたって，ガーナをはじめとする西アフリカ諸国間の研究交流をすすめておられ，さらには東洋におけるアフリカ研究にも強い関心を抱いておられた。

こうしたアビジャンの状況は，わたしにとってもきわめてめぐまれたものとなり，アビジャンを中心に収集活動は順調にすすめることができた。その標本の数かずは，近い将来，博物館の展示室にも置かれることになろう。

4. ダホメの3つの博物館　今回，わたしが収集調査で訪問した国ぐにの中では，ダホメの博物館がきわめて印象的であった。ダホメ国の国際的な玄関はコトヌである。国際空港，貿易港はいずれもコトヌである。ダホメ大学もコトヌの郊外に，その新しい校舎をみせていた。しかしコトヌには博物館はなかった。

ダホメの首都はコトヌから25キロばかり東の，奥深い入江に面した歴史的都市ポルト・ノボである。歴史的といっても，フランス植民の中心地であったという意味においてである。ここに民族誌博物館があった。博物館の門は，ダホメの紋様を彫りこんだものだし，内部の建物は外壁にレリーフをとりつけた，実に楽しい博物館であった。館長のC. M. ダ・クルスは，実務感覚の豊かな能吏を思わせる民族学者であった。

彼の連絡によって，わたしは他のふたつの博物館を訪ねることになった。はじめにコトヌの西方60キロにある古いポルトガル時代の町ウイダの博物館であった。ウイダは，このダホメの海岸が，まだ奴隷海岸とよばれていた時代の奴隷貿易の中心地である。ウイダの博物館をみておどろいた。その建物はポルトガル時代の総督府だという。わたしのような浅学なものには，建物そのものが歴史的記念物であった。そしてその名を歴史博物館という。

内部の展示は，ポルト・ノボとは全く異なり，歴史的な遺品，ポルトガル時代の砦の模型，古地図，絵の記録や写真，そしてダホメ人が送られていったブラジルのバヒア地方の習俗などが各室に展示されていた。写真撮影はあらかじめ拒否されていたが，その展示はわたしに写真など忘れさせるほど不思議な魅力を与えたのだった。

コトヌの町から北へ150キロばかりのところに位置するアボメは，17，8世紀当時のダホメ王国の首都のひとつであった。この内陸の町の中心に，高い赤土の壁にかこまれた一角がある。一角といっても，目測もきかないほど広大である。これがダホメ王国の王宮のあとで，今はアボメ博物館として管理されている。ここは自由な観覧が許されず，もちろんカメラなどは入口で全部あずけるようになっている。

すでに連絡をうけた館長兼学芸員のアソグバ氏の指示で，約2時間にわたり，ガイドのセクロカ君が旧王宮内を案内してくれた。広い王宮内部には，王の居室や王の宝物室，客室など様ざまな建物が

あり，王の居室のように昔のままのものは，まわりに壁をつくり上からトタン屋根をかぶせて，保護してあった。そこでセクロカ君は，王の後宮は4000人いたということを，宣言するような口調で語ったのであった。

それぞれの建物の内部には，割合ゆとりをもって，王の玉座，シャク，装身具，輿，照灯，武器，ナポレオン時代の大砲など，様ざまな王宮遺物が展示されていた。それはもはや民族の宝物であった。民族資料の収集にあけくれていたわたしは，そこにもはやわたしの手の届かない世界をみた。それは全く異民族が手をふれることを拒否するものであった。それは歴史を共有する人びとにとってのみ意味のある世界であった。

そうした中のひとつは，明らかに複製品であった。本物はパリの人類博物館に飾られていると語ったセクロカ君の心の中を，わたしは決して知ることができないのであった。